	捉え方	タイプ(例)	スタートカリキュラムにおける具体例
合科的な指導	各教科のねらいをより効果的に実現するための指導方法の一つで，単元又は１コマの時間の中で，複数の教科の目標や内容を組み合わせて，学習活動を展開するもの	【合科】 生活科 他教科	生活科の学校探検で気付いたことなどを言葉で表現したり，友達と伝え合ったりする学習活動において，国語科の資質・能力「伝えたい事柄や相手に応じて，声の大きさや速さなどを工夫すること」について指導することで，より効果的にねらいの実現を図る。
関連的な指導	教科等別に指導するに当たって，各教科等の指導内容の関連を検討し，指導の時期や指導の方法などについて相互の関連を考慮して指導するもの	【関連Ａ】 生活科 他教科	生活科で春の自然を観察したり，自然のもので遊んだりする体験が，音楽科で春の歌の曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くことに生かされるように関連を意識して指導する。
		【関連Ｂ】 生活科 他教科	算数科で育成する，物と物とを対応させることによって，物の個数を比べることや，個数の順番を正しく数えたり表したりする知識及び技能が，生活科の学校探検で見付けた物を数える際に生かされるように関連を意識して指導する。

発達や学びをつなぐスタートカリキュラム～スタートカリキュラム導入・実践の手引～（文部科学省，国立教育政策研究所）を基に作成

Ⅲ　生活に即した学びを構成する

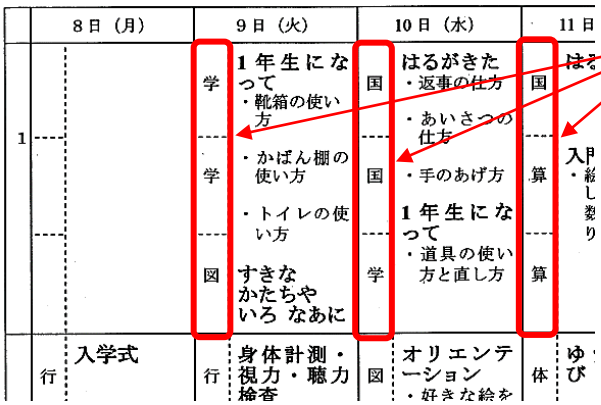
この時期の子供は，生活そのものが学習環境になります。生活する中で興味・関心や思いや願いをもつことで，子供たちは主体的に活動を展開していきます。教師が一方的に選び与える活動ではなく，子供たちのつぶやきや言動から教材になりそうなものや活動の始まりになりそうなことを捉えて活動を計画したり，教師の仕掛けで子供の興味・関心を引き出したりしながら，柔軟な発想で授業を構想しましょう。

子供の興味・関心を出発点に活動をつくると，子供の意欲は膨らみ，主体的な活動になっていきます。教師が，「今日は，学校を探検してみよう。」「〇〇を育てましょう。」と決めたり，２年生に案内してもらったりする受身の活動ではなく，子供たちが「行ってみたいな。」「どうなっているのかな。」と興味・関心をもったことを入り口にすることが，これから始まる学校生活に対して，わくわくするような期待をもち，様々な人や物事に主体的に関わることにつながります。

Ⅳ　弾力的に時間割を設定する

入学当初の子供の発達特性に配慮し，10分から15分程度の短い時間で時間割を設定したり，子供が自らの思いや願いの実現に向けた活動の時間を確保するために60分から90分を単位とした学習活動を時間割に位置付けたりするなど，弾力的に時間割を設定していきます。時間割に子供を合わせるのではなく，子供の実態に合わせて時間割を柔軟に組み替えていくことが大切です。

また，幼児期の生活リズムや一日の過ごし方にも配慮します。例えば，朝の会から１時間目を連続した時間として設定し，幼児期に親しんできた手遊びや歌，リズムに乗って体を動かすことや絵本の読み聞かせなどを行うことは，小学校生活への段差を低くし，安心して楽しい気持ちで一日をスタートすることにつながります。



１単位時間の中に，「学級活動」と「図工」等複数の教科等を組み合わせ，合科的・関連的な指導となるよう工夫されています。
そうすることで，子供の発達特性に配慮した短時間での時間割とすることも可能です。

指導方法

ア　一単位時間の弾力的な運用

スタートカリキュラムにおいては，分化され独立した１単位時間（45分）を固定的に考えるのではなく，教科のねらいを踏まえながら，子どもの思いや願いを生かした弾力的な構成を行なっていく。特に，合科的な指導を実施する場合，各教科のねらいを達成するために，それぞれの教科の時数はある程度確保する必要がある。そこで，１単位時間（４５分）の活動内容をその主たるねらいによって，１５分ごとの３つに分けて教科に割り振ったり，２０分と２５分の２つに分けて教科に割り振ったりして各教科の時数としての算定を行う。

	１　時		２　時		３　時
１５分	生　活	１５分	生　活	１５分	国　語
１５分	国　語	１５分	生　活	１５分	音　楽
１５分	国　語	１５分	音　楽	１５分	音　楽

	１　時		２　時		３　時
２０分	生　活	２０分	音　楽	２０分	国　語
２５分	国　語	２５分	生　活	２５分	音　楽

※　活動内容をもとに割り振られた時数を合計し，生活，国語，音楽の時数は各１時間の算定とする。

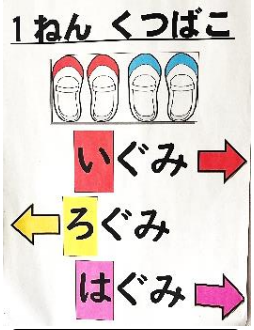
このように，教育課程の中に，弾力的な運用に関する考え方を示すことで，時間割の組み方を工夫することにつながります。

Ⅴ　学習環境を工夫する

幼児教育は，「環境を通して行う教育」を基本としています。保育者に支えられながら子供が自分の力で生活を送ることができるよう環境が構成されています。小学校においても，一人一人が安心感をもち，自分の力で生活・学習することができるように環境を整えていきます。学級は様々な園所から入学してきた子供，様々な個性や特性をもった子供が集まっていますから，どの子供にとっても安心して生活や学習ができるよう環境を工夫することが重要です。

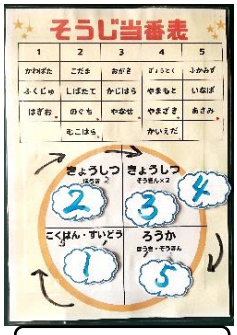
視覚的に訴える表示

指示がなくても自分の力で取り組むために，「見て分かる」，「見てできる」ようにするための支援です。特に，一斉指導の場面が増えると，視覚優位の子供たちの困り感は大きくなります。言葉で説明するだけでなく，絵や図，写真など，視覚的に訴える表示をすることは，子供の理解を助けます。また，子供の目の高さで校内を回ってみると，様々な表示が高いことに気付きます。特に，１年生の生活と密接な関わりのある教室やトイレの表示などは高さの確認が必要です。



靴箱の場所

靴の入れ方



掃除当番表

机の中の使い方

提出場所

傘の入れ方

学習準備の仕方

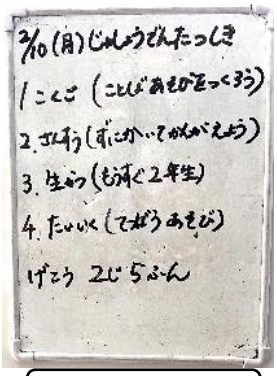
声の大きさ

かばん棚の使い方

分かりやすい板書や見通しをもたせる掲示

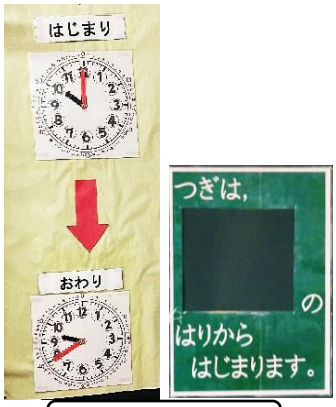
板書は，学習の流れや内容を視覚的に訴えるため，活動への理解を深めます。教師の指示がなくても，自分で時計を見たり活動の仕方を考えたりして生活できるようにします。

１日の予定，活動のめあて，活動の仕方，手順，机の上に出す物，持ち物等はいつも決まった場所に表示しましょう。活動が変更される場合は，事前に予告し，何がどのように変更されるのかを分かりやすく示すことが大切です。

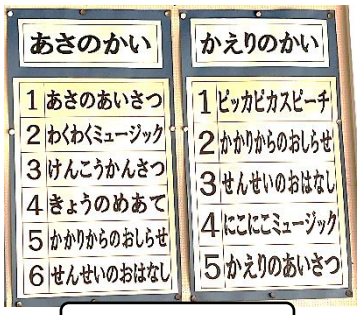


１日の流れ

学習の流れ



時間の見通し



会の進め方

活動の流れ

給食時間の流れ

集中しやすい環境

教室の前面はシンプルにし，子供たちの集中力を高めます。教卓やオルガンの上など子供の目に入りやすい所は，できるだけ物を置かないようにし，常にきちんと整理をしておきます。授業で使わない資料などは別の場所へ移し，作品等は教室背面に掲示します。

教室前面

教室背面